

ふるさと交友録

～ 伊藤 公平 ～ 11

「ふるさと」には、いろいろなひとがいる。この「交友録」では、月1回のペースで公平さんの“大切なひとびと”を紹介していきます。



日本木琴協会会報・木琴と私シリーズ
no.29より「楽しかった木琴練習(小3)」

伊藤公平(いとうこうへい)北見市在住、郷土史研究者。私設図書館「妻の風文庫」と「野草苑があでんきたみ」主宰。平成13年～20年、みんとに「ふるさと四方山話」「ふるさと・そぞろ歩く記」を連載。

北原千鳥さんから手紙が届いた。「北見市内明細図」の作者北原輝義さんの長女である。マリンバの奏者であり指導者であり、ここ二十数年は中国での普及活動と日中交流演奏会に全力傾注という方である。中学生の頃からめきめきと頭角を表して天才少女と謳われ、NHK北見放送局から何度も演奏が放送されている。同じ頃、私は放送合唱団の一員だったが、器楽と声楽の違いや放送日の違いから、出会いの機会はほとんどなかった。何よりも、私などには全く持ち合わせのない天賦の才あふれる千鳥さんは、高く、遠い、まぶしい存在だった。

今回はからずも「北見市内明細図」の復刻出版が縁で、千鳥さんから連絡があり、あわたたしく何度かの通信から見えた千鳥さん像は、マリンバの筋の高い理想をもつ一方で、そのせいか、つややかな言葉づかいで、何とまあ若々しい印象の、父輝義さんを今も深く敬慕してやまない印象の方だった。

父輝義さんからのさりげない贈り物だった木琴を夢中になって叩く(弾く)千鳥

さんに、輝義さんは何を感じたのか。

平岡養一さんの演奏会が北見で行われた時のこと、「…又とないチャンスとばかりに私(千鳥さん)をつれて行こうとしましたが、六歳未満お断り」、そこで大きなリユクに五歳の私を入れて入場、演奏がはじまるとリユクの口を開けて頭を出させ聴かせてくれました(北原千鳥「マリンバと共に」二〇〇四)。次の日の新聞は大賑わいだったという。馬鹿丸出しの親馬鹿ちゃんりん、と言いたい、木琴を無心に叩く千鳥さんの未来のために、これ以上の事は考えられない真剣な行動だったのだろう。輝義さんはさらに下総皖さん、朝吹英一さんという当代一流の音楽理論家や奏者に乞うて師事させた。千鳥さんからの手紙には「私は子供心に、これは、やるしかない」と覚悟した」とあり、さらに

「私そのものが、父の残した仕事といえるかもしれない」と書いている。千鳥さんの弟妹たちにも輝義さんはそれぞれの高等教育を受けさせているのだから、子供達の皆に「北原さんの残した仕事」は見事に花咲かせていると言っている。